



地域連携の部屋

このコーナーでは、徳島大学病院が徳島県や他の医療機関の皆さま等と協力し、患者さんへのよりよい医療の提供を目指してすすめている、様々な取り組みについて取り上げます。

Vo.7

寄付講座⑤ 地域脳神経外科診療部

今回は平成23年11月に発足した地域脳神経外科診療部についてご紹介します。

■県南で念願だった脳神経外科の常勤体制

平成23年11月に地域脳神経外科診療部が設置され、徳島県立海部病院で念願とされていた常勤体制での脳神経外科の診療が始まりました。脳卒中(脳血管障害)は脳の血管が詰まる脳梗塞や、くも膜下出血などの出血性疾患など、突然、脳に起こる血管障害をひっくりめた呼び方です。これは日本の死因で、がん、心臓病に次ぐ高い比率となっていますし、命を取り留めても重い後遺症が残ることが少なくありません。また、65歳以上の高齢者では寝たきりになる原因の3割以上を占めるといわれます。著名人では故・小淵元首相や長嶋茂雄さん、サッカーのオシム監督が脳梗塞で倒れました。徳島県南部地域は交通事情や地理的条件から、脳神経外科分野の専門医が不在のままという、いわば空白地帯となってきました。「これまでずっとニーズが高く、地元の強い要望を受けて何とかしたいということで、今回の診療部設置となったわけです。」(影治特任教授)これまで、脳神経外科常勤医は不在で、週に1回の外来だけを行っていましたが、地域脳神経外科診療部の2名のスタッフと脳神経外科大学院生や関連病院の先生の協力を得て毎日、海部病院で脳神経外科診療が行えるようになりました。脳卒中の治療を行うためには、発症からの時間がとても大事で、脳梗塞の発作が起こってから、「3時間以内」が命運を分けます。救急車の手配、搬送時間などを考えると、発症1時間以内に病院に到着し処置す

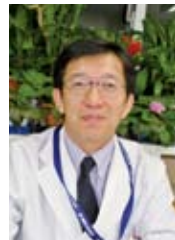
ることが理想といわれます。「専門医がちゃんと患者さんを診て、まず初期対応を適切にすることが肝心です。だからこそ、地元で身近に常勤していることが大切なのです。」(影治特任教授)

■医療格差のは正を目指して地域貢献

徳島大学では「海部プロジェクト」として、循環器内科、救急集中治療部、脳神経外科が、僻地医療の研究、改善に取り組んできました。その中で、海部郡内から脳梗塞などの脳疾患患者を専門医がいる病院へ緊急搬送した場合は2時間以上かかり、徳島市中心部から徳島大学への平均搬送時間40分に比べ100分も多く時間がかかっており、医師不足が深刻な海部郡の実態が明らかになっています。僻地という地理的環境に加えて、高齢化の進行と独居の増加といったことも悪影響となっているようです。県南の日和佐で生まれ育った影治特任教授は、とくに県南への強い思い入れがあります。「本来なら受けられるはずの治療が、県南でもきちんと受けられる機会を増やしたいですね。少しでも郷里、郷土の役に立ちたい。」と、穏やかな風貌に熱い思いを込めて語ります。「海部病院の先生方や看護師、検査技師、放射線科技師さんの協力を得て、県中央部の病院と遜色のない医療サービスを住民の方に提供したいと考えています。また、高度な治療を有する急性期の患者さんと、比較的軽症でリハビリが必要な患者さんに対応できるように地域と密着した医療体制を目指していきます。」

「地域医療連携」について

徳島大学病院地域医療連携センターでは、大学病院と地域の医療機関との円滑な橋渡しを目指して、大学病院での高度先進医療から、患者さんがお住まいの地域の診療機関と連携し、在宅療養へと継続できるようサポートしています。



説明は
地域脳神経外科診療部
特任教授

影治照喜

(かげじ てるよし)

■問い合わせ
地域脳神経外科診療部
Tel.088-633-7149